

自然観察会3回目

2015. 1. 18

参加者: 鈴木文、松尾、荻原、山口、渡辺一、

石尾、岩田令、北島、星幸、小泉、岸本麻 初参加 大城

テーマは「生き物たちの冬の過ごし方」。最初の2回はテーマがなかった。配布物: 記録のために各自にバインダーを配る。拡大鏡と移植ごて。今日は、佐々木順子さんの年賀状「冬の野原も意外とカラフル」を配ると、皆さんそこに描かれた野の草のかわいさとふんわりした色彩に心を和ませる。その後に、彼女の作品。「のはら新聞」を配る。野草を見る目が変わるかも知れない。

コース。教会の中で拡大鏡、パンを配る。夢二、富弘、ちひろ美術館で見た詩などを披露し、自然への完成の大切さをアピール。セイジ、クコの観察。今日は門を出て、左に曲がる。印刷屋さんの手前に幅7, 8mの空き地がある。先週の下見でここで今回のテーマである「生物たちの冬の過ごし方」について学べると判断。空き地を見渡して、この空き地の中に植物の越冬手段が幾つかあるので3つ程探してくださいと云う。3つの方法は、種子、根茎、ロゼットをつくる。エノコログサ、キク科の草などの種子の数を数えてもらう、ここで、梓法の説明をしたが、被度についてはあまり触れられずに、説明不足。この場所を一ヶ月おきに観察すると説明、やや不徹底。ツタの壁への貼りつき方、オオイヌノフグリの開花(極小でも)、アメリカフウロウの紅葉などの説明(佐々木順子さんの冬の草の紅葉の年賀状: 冬の野原は意外とカラフル)。

徳親公園に移動。入口に植えられているユズリハの葉脈の紅桃色の美しさを鑑賞。中に入って、皆さんに園内のサクラの木を見上げてもらい、ミノムシの存在を探してみる。発見なし。小泉さんが、昔、ミノムシを裸にして、折り紙や毛糸で蓑をつくらせるお話をしてくれた。冬芽を取って芽鱗を一枚ずつはがして、中の春芽を出してみる。最後に緑の芽が出てきたのをみんなでお観察。これが春になって新芽として開くことになるのだ。少し上の方に花芽になる芽が見られた。葉芽と異なり、うすすらとピンク色が感じられる色合いであった。そのあと、1m程ある幹に各自手を当ててもらい、サクラの幹のぬくもりを感じて頂く。

近くに生えている木の名前を、北島先生に聞かれ、「クスノキ」と答える。そこで、クスノキとサクラの幹の違いを比較して貰う。クスノキの幹には縦にしわが見られ、サクラには横に走る樹皮があり(東北にはこのサクラの皮目の美しさをお茶の缶に貼り付ける工芸がある、と北島先生)違いがあることが分かる。ではこの皮目は植物にとってどんな役割をしているか。上からの雨水を流すなどの答え。呼吸のためという答えはなかった。先日の下見の時に会いました95歳とか言われていたおばあさんにまた出会う。雨がなければいつもこの公園に来ますよと言われ、皆さん驚き、私もこの間と同様に感動した。階段を下りて、ケヤキの太い幹を紹介する。先走って教えて失敗したが、ケヤキの太い幹の下には、数センチ四方の小さな剥がれおちた樹皮が散らばっている。子供たちの自然の遊びに、これをジグソーパズルのように幹に当てはめてみるというものがある。何人かの方が試みていたが、北島先生が、一つきちんと当てはまる木の皮を見つけられた。拍手！ ついでに、この木の皮の下に、時として昆虫

などが冬ごもりしていることを伝えたが、直ぐに山口さんが、幹から皮を剥がして、茶色のクモの成体を見つけた。ここで質問。「冬に昆虫などが樹木や土手などに越冬する時は、南側にするか北側にするか？」皆さん、南側との答えが多かった。しかし、答えは、北側。理由は、昆虫はほ乳類と異なり、体温が周辺の環境に支配され、南側では、寒暖の差が大きいため、体温保持が不安定になるため南側は越冬には適さないため。

階段を下りて、公園を出て、正面の道沿いの草むらにあったカラスノエンドウの「蔓」が、葉の先端にあることを観察。ここには、ナガミシナゲシ小さな芽が沢山発生していた。この辺一帯が凄惨な群落になる兆しを見る。角に、ヒイラギの木があった。良く葉を見てもらえばよかったのに、ここでも先走って、同じ木にも拘わらず、葉の形が違うことを示してしまった。こういうことを避けないと、皆さんの観察力を増やすことは出来ない。3時になって、残念にも終了したが、今日も1回目と同じ距離だったろうか。しかし、さらに様々なことに気付かされて、収穫はあったと思う。